

岡山大学広報

いちよう並木

OKAYAMA UNIVERSITY MAGAZINE



OKAYAMA
UNIVERSITY



新しい 考古学の扉

Vol. 94

2020

CONTENTS

岡山大学の研究誌

細胞生理学 神谷厚範

広い世界で活躍する岡山大学の学生たち

ESD教師教育世界大会を開催 **OU NAVI**

画期的アプローチと 壮大な規模で 考古学は新時代へ



誕生の地アフリカから世界に拡散し
爆発的な繁栄を果たしたヒト。
それはなぜか。これから私たちはどこへ進むのか。
その答えを導く「人間の本质」に迫るべく
今、新しい考古学の扉が開かれようとしている。



今、人類が直面する
さまざまな課題の根本は？

いくつもの環境変動を乗り越えて、道具や生活環境を作って繁栄してきた人間だが、一方では環境破壊、戦争、差別、貧困を生み出し、今や人類社会の存続が危ぶまれる段階に達している。こうした岐路に立ち、私たちは未来に向けてどうすればいいのか？

「この課題克服のためには、根本的原因を明らかにする必要があります。人間はどういう生き物なのか、と。そこに迫るために、過去を研究することが今の生き方、さらにはこれから私たちがどのように生きていけばいいかわかる手がかりとなるわけです。それが考古学です」。

そう語るのは松本直子教授。人間の心の働きから歴史の「なぜ？」を追究する認知考古学を専門とし、岡山大学大学院社会文化科学研究科附属「文明動態学研究センター」(以下「研究センター」)の副センター長も務める。



岡山大学で世界規模の 考古学プロジェクトが始動

その研究センターが主体となり、今、壮大なスケールで2つの考古学プロジェクトが始まっている。「BE-ARCHAEO」や「OUT OF EURASIA」。ともに従来の考古学研究にはなかった視点や技術を加え、世界の研究者と連携する文理融合的な研究で、松本教授は中心的役割を担う。文明を生み、ここまで繁栄してきた人類。われわれが持続可能な社会を創るためのヒントも歴史の中にあるはずだ。それをさまざまなアプローチで探り、統括していくという。さて、人間はどういう生き物なのか。



文明動態学研究センター 副センター長
大学院社会文化科学研究科 教授
松本 直子 (まつもと なおこ)

■専門分野／考古学
昭和43年生まれ。福岡県北九州市出身。九州大学文学部卒。九州大学大学院文学研究科修了。博士(文学)。岡山大学文学部専任講師、准教授を経て平成27年より現職。著書「認知考古学の理論と実践的研究」(九州大学出版会)で第9回雄山閣考古学賞特別賞を受賞。



文明動態学研究センター
平成30年10月に岡山大学大学院社会文化科学研究科附属のセンターとして設立。現代の諸問題に関わるさまざまな要因を紐解くため、考古学や歴史学に加えて関連諸分野と理化学的研究を統合した学際的研究体制を構築し、「文明基礎科学研究」[「社会動態研究」]の2セクションで構成される。また、日本史研究室の今津勝紀教授の主導で古文書の修復など、地方の歴史保全に貢献。平成30年7月豪雨においても水害にあった膨大な資料のレスキュー、修復を行ってきた。



日欧の学際的交流から生まれる革新的研究

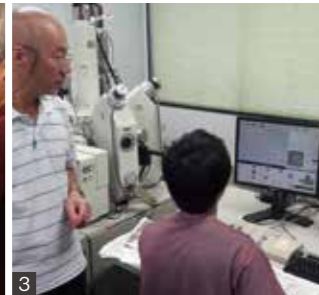
RISE日欧合同プロジェクト BE-ARCHAEO

BEyond ARCHAEOlogy / 考古学を超えて

photo by Marco Merola



ドローンを使って上空から古墳や周辺の地形を確認



- 1 鷲尾塚古墳の石室をデジタルカメラで撮影し、3Dモデルを作成
- 2 岡山大惑星物質研究所の神崎正美教授も考古資料の分析に協力
- 3 岡山大大学院自然科学研究科の野坂俊夫准教授はトリノ大学の研究者と連携して土器やガラス玉の分析を推進



プロジェクト始動直後の現地調査では、さつそく電気探査など新しい手法も取り入れられた。「トリノ大学は考古科学による分析技術が進んでいます。化学や物理学の専門家がイタリアの考古資料分析で培った実績を、日本の考古学にも応用してもらえたら…」と松本教授。

日欧それぞれの知識と技術で イノベーションを

BE-ARCHAEOは、かねてから日本の考古学に関心を示していたトリノ大学の元に、岡山大学の研究戦略マネジメントを行うUR Aの働きかけが届いたことが発起となった。欧州連合(EU)の「Horizon 2020研究・イノベーションスタッフ交換交流プログラム(RISE)」の助成により壮大な規模での研究体制が整い、岡山大学で平成31年2月に開かれたキックオフ・ミーティングには日欧の幅広い分野の研究者たちが顔を揃えた。

岡山大学とトリノ大学の 考古学への想いを起点に

たな歴史像と専門的技術の開発を目指す。

日欧の学際的交流で 古墳時代の謎に挑む！

日・欧考古学者と考古科学専門の幅広い分野の研究者が連携し、日本の古墳時代に関する高度研究が昨年より始まった。「BE-ARCHAEO (Beyond ARCHAEOlogy〜考古学を超えて〜)」と名付けられたこのプロジェクトは、トリノ大学など欧州の大学及び民間企業6機関、日本では文明動態学研究センターが中心となり、島根県教育委員会もタイアップしている。

BE-ARCHAEOの主目的は、国際的な交流を通して先端的な分析技術と考古学的な知見を合わせ、古代の吉備と出雲の謎を解明することである。岡山大学考古学研究室が実施する鷲尾塚古墳(岡山県総社市)の発掘調査に欧州チームも加わり、先端的な知識と技術を取り込みながら古墳時代の謎に挑む。これまでの発掘調査で出土した考古資料もさまざまな手法で分析し、古墳時代の葬送儀礼やその背景にある古代日本の社会、吉備を中心とした日本の古代国家形成期の新



岡山県総社市にある鷲尾塚古墳

集められたデータや史料を基に連携して分析を行うなど、交流促進からイノベーションが生み出されるという点でもメリットは大きい。岡山大学からは文理両分野の研究者が参画し、欧州からは年間約30人の研究者を迎えることになる。

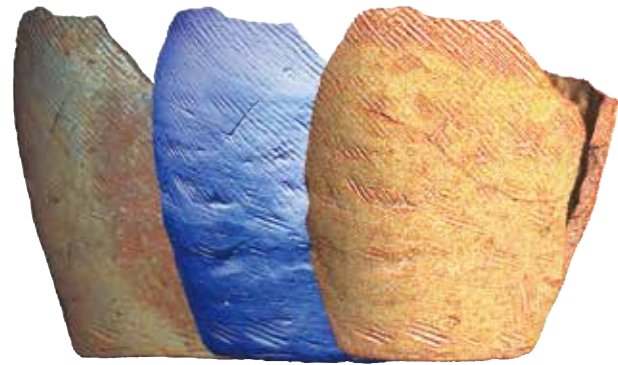
研究成果の活用を促し さらなる発展を目指す

研究成果を専門家の間だけにとどめず、活用し発展させることとBE-ARCHAEOが掲げる大事なテーマだ。一般に向けた情報公開も視野に、データの3D化やドキュメンタリームービーの作成も計画。令和4年度には、イタリアのトリノ東洋美術館と島根県の古代出雲歴史博物館での展示も計画されている。欧州での日本の考古学に焦点をあてた展示はめずらしく、またとない機会になりそうだ。



出ユーラシアの統合的人類史学 OUT OF EURASIA

新学術領域研究(研究領域提案型) 2019年度~2023年度 ~文明創出メカニズムの解明~



自然界とモノと人間の間には、生物と無生物の違いも超えた「写し」が見られる。人間の心の仕組みと関係するもので、文明形成の謎を解く手がかりとなろう。



モノをさまざまな角度から徹底的に検討する。3D計測で器物に残る製作者の動作の痕跡を可視化。X線CTで表面からは見えない情報を明らかにし、化学分析で製作地を探る。

象徴的意味や世界観を表す人工物は、文明形成過程で重要な役割を果たす。



ユニークなのは、従来の研究ではほとんど問題にされなかった「心」にも焦点を当てたことだ。「人は環境に合わせるだけでなく、人工的環境を生み出すことで心、身体、社会を変えてきました。この研究は、自然と文化、心と物質をつなぐ人間の行為や認知に焦点を当てて、新しい文明形成論に取り組みます」。人はモノを作り、そしてモノに作ら

モノを作りモノに作られ 共進化してきた人間

OUT OF EURASIAは文明動態学研究センターが本部となり、国内40以上の機関に属する研究者と、メキシコ国立人類学歴史研究所、アリゾナ州立大学、タイ国立霊長類研究所などの海外機関と連携して研究を進める。令和元年9月には岡山大学でキックオフ・ミーティングが行われた。
本プロジェクトは、ユーラシア大陸を出て拡散した人類の到達地であるアメリカ、オセアニア、そして日本列島の3地域の文明形成のプロセスを体系的に比較し、現代までを結ぶ統合的研究を展開するというものだ。

ユーラシアを出た人間が 到達した3地点を比較

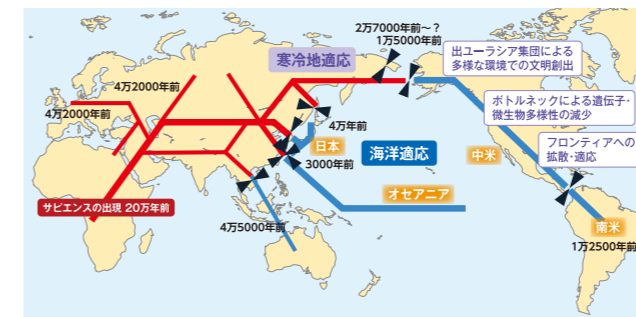
れるものでもあるのだ。

物質を通じて見る 人間の心と世界観

研究は7班で分担してテーマに取り組む。松本教授がリーダーを務める「アート班」では地域のアートを比較検討し、物質文化が人間にどんな力を及ぼすかといったことを研究する。モノの中には環境や世界観など、人の行動や思考に関する情報が詰まっているという。
それは、松本教授がこの道を目指すきっかけになったという「なぜこの材質を使い、なぜこの形になったのか、考古学を学ぶと歴史の変遷の中にモノを見、モノを通して社会が見られるようになる」という言葉にも通じる気がした。



数万年前にアフリカからユーラシア大陸に拡散したホモサピエンスは、その後さらに日本列島、南北アメリカ大陸、そして太平洋の島々にも広く進出した。なぜ未踏の地を目指し、各地で文明を形成したのか。その壮大な謎に挑み、「人間」についての本質的問いに答える。



紀元前1万年には10万人足らずと推定される人類が人口70億人以上の繁栄を果たしたのはなぜか。一方で、人類存続に関わる諸問題を生み出してしまったのはなぜか。その答えは「人間とはどういう生物なのか」を知ることにある。この本質に迫るべく、松本教授がBEA、ARCHAEOと併行して取り組むのが「OUT OF EURASIA」出ユーラシアの統合的人類史学。ユーラシア大陸を出て、人はなぜ未知のフロンティアを目指したか。それぞれの地域で形成した文明を解析し、未来につなげる。

人はなぜ未知のフロンティアへ 拡散したのか？

美術

県美術展の最高賞に輝いた
画壇の新鋭

昨年開催された第70回県美術展覧会（岡山県山陽新聞社など主催）の「洋画部門」で、一般応募の最高賞である山陽新聞社賞に輝いたのは、教育学部1年で美術を専攻する金谷顕人さん。受賞作である「静物」は、祖父母の家にある椅子、そして机にワイヤネットと皿を配置し、赤いさくらんぼを添えた作品。青色でまとめられた色彩の中に奥行きや光の加減が絶妙なバランスで存在し、「特に意識せず構成に加えただけ」というクローズのしわが表情を与える。50号サイズのキャンバス全体に漂とした静けさが漂い、独特の世界感に審査員から高い評価が上がったという。300点以上が集う部門にあって10代での最高賞受賞は快挙だが、金谷さん本人は「うれしさもあるが、驚きの方が大きい」といつて謙虚だ。

今回の出品は3回目になり、前年の挑戦では奨励賞を受賞している。驚くべきは金谷さんの画歴で、子供の頃から趣味で描いていたとはいえ本格的に油絵を始めたのは高校時代。岡山県立朝日高校1年の3学期に美術教師でもある担任から誘われて絵を描くようになり、絵画の基本であるデッサンを学ぶようになったのは2年生になってから。大学で美術を専門的に学ぼうと決めたのがきっかけだったという。デッサン力が備わり、

発足10年の節目被災地支援と 災害に強い岡山を

2 011年5月、東日本大震災をきっかけに「何かしたい」という想いを持った岡山大学の学生と職員を中心に発足した災害地支援団体「おかやまバトン」（通称：おかバト）。現在、学生メンバーは19人。「息の長い被災地支援」をコンセプトに活動を続け、グラウンドが使えず練習に支障が出た南三陸の志津川中学校野球部や福島の小学生に向けたサポートと交流は今も継続している。みんなで東北に向かいつなぐりを再確認する旅も回を重ね、この春で発足から10年目。その間に、昨年の台風19号など甚大な自然災害が多発し、災害が少なかったはずの岡山でさえ平成30年7月豪雨を経験した。防災への関心が全国的に高まる中、最近では「災害に強い岡山づくり」への活動にも力を入れる。

代表を務める瀧原茉友さんと副代表の西馬亜佑さんともに兵庫県出身。阪神淡路大震災の経験を教訓とした防災学習を受けて育ってきたふたりが岡山大学へ進学した年に、平成30年7月豪雨は起こった。災害経験が少なく防災意識が低いと言われていた岡山。おかバトの活動は被災地支援だけでなく、防災教育の必要性を感じて小学生を対象にした「防災リーダー育成教室」も開催。紙食器づくりや非常食体験のほか、防災グッズの

被災地支援

Okyama Baton



た く さ ん の 人 と 関 わ り、
い い 経 験 を 積 み、
そ れ が 「 誰 か の 役 に 立 つ 」 な ら
な お う れ し い。

広い世界で

活躍する

両道

岡山大学の

学生たち

岡大を選んでよかったのは、
油絵だけでなく、いろんなジャンルの
制作を体験できることです。



金谷 顕人
教育学部1年

独自の色彩感覚や感性にも磨きがかかったことが今回の受賞につながったとも言えるが、それ以外にもこの受賞には家族さえも驚きを隠せなかったらしい。

今、大学では油絵だけでなく彫塑やデザインなど幅広い分野を経験し、中でも木彫におもしろさを感じているところだと言う。「大学時代でないといけないことも多いですが、今のうちにいろんな分野の制作を体験してみたいです」と、静かな口調の中に旺盛な制作意欲が浮かぶ。将来は高校の美術教師を目指しているとのこと。制作の引き出しを多くしておくことは教育現場に活かす基礎力になるが、同時に自身の作品へも直結する。

現在、春に東京都美術館で開催される「東光展」への出展を目指し、1000号サイズの絵の制作に取り掛かっているところ。今回描くのは古い水道。「生



「静物」油絵 50号

紹介を兼ねたビンゴゲームで子どもたちの防災への興味を深めた。さまざまな勉強会やイベントには「非常持ち出し袋」を持参し、「いざ」というときどんなものが「必要か」を知ってもらう取り組みも行っている。

おかバトの「バトン」について尋ねると、「岡山から東北にバトンをつなぐ」という意味に加えて、地域をつなぐ、世代をつなぐ、災害で得た教訓をつなぐというイメージを持っていきます」と瀧原さん。西馬さんは「OB・OGが今も協力的で、私たちの知識が薄いところを埋めてくれたり。こうした活動のバトンを渡しながら、おかバトがずっと続いていくことを願います」。他の災害支援団体ともつながり、バトンを渡し合いながらの活動を通じて、医療や法律など専門性を活かした支援があることも知ったという。では、学生主体の団体だからこそできることは？「子どもの支援を対象とした活動でしょうか。年齢が近い分打

ち解けるのも早く、被災地では安心感を抱いてもらえている気がします」。この笑顔に救われた子どもたちは多いはずだ。将来、瀧原さんは教師として防災活動に関わりたいという夢を、西馬さんは副代表という立場で培ってきた「つなぐ」「支える」という力が発揮できる仕事をと語る。

おかやまバトン

代表 瀧原 茉友
教育学部2年

副代表 西馬 亜佑
文学部2年

おかやまバトン
5年間の活動を1冊に
まとめました！



岡山大学ユネスコチェア副チェアホルダー
ESD協働推進室室長

藤井浩樹 教授

FUJII Hiroki

What is ESD?

Education for Sustainable Developmentの略。「持続可能な開発のための教育」と訳され、持続可能な社会の創り手を育てる教育のこと。

Okayama × ESD

- 2005年 **世界初** 岡山地域がRCE(国連大学が認定するESDの地域拠点)に認定
- 2007年 **アジア初** 岡山大学がユネスコチェア(ESDプログラム)に認定
- 2014年 岡山市・名古屋でESDに関するユネスコ世界会議を開催
- 2016年 RCE岡山がユネスコ/日本ESD賞を受賞
- 2017年 岡山市がユネスコ学習都市賞を受賞
- 2017年 SDGsの達成に向けたRCE第一回世界会議を開催

なぜ岡山は注目されているの?

岡山ならではのESD推進の切り札がある!

- 社会教育** 岡山は各公民館に社会教育主事を配置、活発な公民館活動でESDを推進!
- 学校教育** 岡山市にはESDの推進拠点となるユネスコスクールの加盟校が51校!

11.25 ESDを実践する岡山市の小中学校・公民館の視察



11.24 ESDフォーラム ESD岡山アワード2019



藤堂栄子氏による特別講演

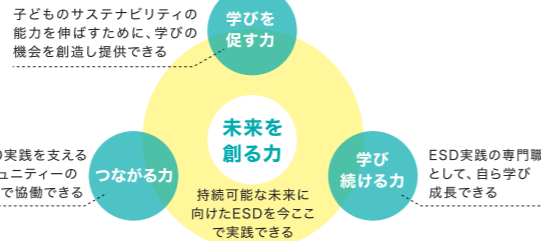
11.23 講演・分科会・研究発表



11.22 ESD教師教育に関する声明の発表



藤井教授



ESDの教師教育の
アジア太平洋フレームワーク
(コンピテンシー・フレームワーク)
出典: Okayama University (2019).
Report on the Project
"Teacher Education for ESD
in the Asia-Pacific Region".

世界初の国際的な枠組みとして「ESDに
取り組む教師の資質能力に関するフレーム
ワーク」を世界大会で発信しました。これは
アジア太平洋地域16カ国との連携により作
成したもので、「持続可能な未来を創る力」を
核として、①学びを促す力、②学び続ける力、
③つながる力の3要素で構成しています。枠
組みの普及を目指し、ESDの動機付けや、
教材・ツール開発、評価システムの確立など、

発信したフレームワークとは?

世界大会の国際的な枠組みとして「ESDに
取り組む教師の資質能力に関するフレーム
ワーク」を世界大会で発信しました。これは
アジア太平洋地域16カ国との連携により作
成したもので、「持続可能な未来を創る力」を
核として、①学びを促す力、②学び続ける力、
③つながる力の3要素で構成しています。枠
組みの普及を目指し、ESDの動機付けや、
教材・ツール開発、評価システムの確立など、

世界大会の特色は?

ESDは学校・社会・企業教育など、生涯学
習すべての領域に関係するものです。本大会で
は、「教師教育」つまり、「先生をESDにどう
触れさせて、ESDを指導する力を養うか」に
焦点を当て、議論しました。2015年に国
連サミットで採択されたSDGs(持続可能
な開発目標)は、2030年をターゲットイ
ヤーとして、17の目標と169のターゲット
の実現を社会全体で目指しています。本大会
では、「SDGsの達成に向けESDはどうか
あるべきか」をメインテーマに、各国のESD
の優良事例からSDGs達成への力ぎを探
りました。

教育機関や国、国際機関レベルで取り組むべ
き事項を掲げた9項目の声明も公表しまし
た。今後10年間のESD教師教育の方向性
を示せたのではないかと思います。

岡山大学が目指すべき ESD教師教育の方向性とは?

本大会では、ESDとGCED(地球市民教
育)の連携についても議論を深め、教育分野に
おいて、両者の連携によるSDGs達成を世界
レベルで検討した初めての会議になりました。

今後の展開について教えてください。

一つは、アジアや太平洋の大学とともに、
ESDを指導する教員を養成・研修する活動
を続けていくことです。新しい体制づくり
にも取り組んでいきたいですね。「岡山モデル」
つまり、大学・行政・市民団体が連携しなが
ら「whole community approach(地域全
体のアプローチ)でESDを推進していくこ
とが重要と考えています。

もう一つは、世界レベルでESDを考え、連
携していくことです。民族や宗教、経済格差
など、多様性に富んだアジア太平洋におい
て枠組みをつくるのができたので、世界でも
枠組みを作っていくかどうかが、それが次の
課題ですね。

世界大会を通して見えてきたことは?

「SDGsを達成するためにESDが必要」
というところで、みんなが目指す方向があ
らざるを得ないと思います。SDGsは、これ
まで取り組んできた活動やこれから取り組
むべき活動をキュッと束ねるような、オーバ
ーアチングといったイメージです。全体を
俯瞰するものがSDGsであって、その鍵とな
るのがESDではないでしょうか。

pick up!



2019 Global Conference on Teacher Education
for Education for Sustainable Development

ESD 教師教育 世界大会を 開催

アジア太平洋フレームワークを
世界に発信



岡山大学が目指すべき 方向性、今後の展開とは?

令和元年11月22~25日の4日間にわたり、岡山大学をはじめとする岡山市内で「ESD教師教育世界大会」が開催されました。世界40カ国・約200人の教育関係者らが集い、各国の現状と課題を発表。ESDに取り組む教師の資質能力に関するアジア太平洋フレームワークを世界に発信しました。

岡山大学は全学を挙げてSDGsの推進に取り組んでいるだけでなく、ESDのユネスコチェアならびに国連大学認定のRCE(ESDの地域拠点)である岡山市の中心機関として、ESDの教師教育に取り組んできました。また、ユネスコスクール支援大学間ネットワークの主要大学の一つとして、この分野を牽引しています。これらのESDおよびSDGsへの貢献や先進性により、今大会が岡山大学で開催されることとなりました。

SDGs達成のために不可欠であり重要な要素であるとされるESD。本大会の企画運営を務めた岡山大学ユネスコチェア副チェアホルダー・ESD協働推進室室長の藤井浩樹教授(大学院教育学研究科)に、大会を振り返るとともに、『SDGs達成のためのESDの貢献』をキーワードに、岡山大学が目指すべき方向性や今後の展開について尋ねました。

自然界で最小の励起エネルギーをもつ 原子核状態の人工的生成に成功

～超精密「原子核時計」実現に大きく前進～

RESEARCH

異分野基礎科学研究所の吉村浩司教授、産業技術総合研究所(産総研)、理化学研究所、大阪大学、京都大学、東北大学、ウィーン工科大学、高輝度光科学研究センター(JASRI)の共同研究グループは、世界で初めてアイソマー状態を人工的に生成することに成功しました。本方法は大型放射光施設(SPring-8)の高輝度X線を用いるもので、放射線の少ないクリーンな環境下でアイソマー状態を自在に生成できるという利点があります。これによりアイソマー状態の研究が進展し、原子核時計の実現に向けて大きく前進するものと期待されます。本研究成果は英国時間9月11日、英国学術雑誌「Nature」のオンライン版に掲載されました。

光合成で“ゆがんだイス”型の触媒が 酸素分子を形成する仕組みを解明

～人工光合成触媒の合理的設計の糸口に～

RESEARCH

異分野基礎科学研究所の菅倫寛准教授、秋田総理准教授、沈建仁教授、理化学研究所の吾郷日出夫専任研究員らの共同研究グループは光化学系IIの“ゆがんだイス”の形をした触媒が酸素分子を形成する直前の状態の立体構造を決定しました。この結果から、光合成において酸素分子が形成される反応の仕組みが明らかになりました。本研究成果は、米国東部時間10月17日、米国科学誌「Science」のResearch Articleとして掲載されました。



大学の動き(2019年10月～2020年2月)	
2019 10月	<ul style="list-style-type: none"> 1日 ● 令和元年度秋季岡山大学入学式、大学院入学式を挙 25日 ● 岡山大学Alumni会長の小長氏を招き、岡山大学創立70周年記念講演会を開催 26日 ● 岡山大学ホームカミングデイ2019を開催
11月	<ul style="list-style-type: none"> 2～4日 ● 大学祭(津島祭・鹿田祭)を開催 16・17日 ● 岡山大学農学部収獲祭・農学部フェアを開催 22日 ● カナダ・ヨーク大のチャールズ・ホプキンス教授に名誉博士号を授与 25日 ● 教育学研究科の国吉康雄記念講座が岡山市文化奨励賞を受賞
12月	<ul style="list-style-type: none"> 20日 ● 理化学研究所放射光科学研究センターと研究協力協定を締結 26日 ● 岡山大学、岡山県警察本部、株式会社トスコとの共同研究契約に関する協定書調印式を開催
2020 1月	<ul style="list-style-type: none"> 9日 ● 国連貿易開発会議(UNCTAD)と包括連携協定を締結 16日 ● SDGsの達成に向け萩原工業株式会社と連携・協力協定を締結 24日 ● 医学部医学科が国際基準に基づく医学教育分野別評価に適合認定
2月	<ul style="list-style-type: none"> 6日 ● 「おかやま次世代電池共創コンソーシアム」を発足 14日 ● タイに日本留学海外拠点連携推進事業ASEAN拠点バンコク事務所を開設

PICK UP!

岡山大学初の統合報告書 「Pay it Forward」を発行!

創立70周年を迎えた本学は10月26日、「岡山大学統合報告書2019-Pay it Forward」を発行しました。統合報告書とは、組織がどのように長期にわたり価値を創造するかを説明するもの(国際統合報告フレームワーク(IIRC)より引用)で、本学としては初の試みとなります。財務情報と非財務情報を組み合わせて、ビジョンと有機的に統合(Integrated)した統合報告書では、本学のこれまでの成果や実績を振り返り、未来につながるビジョンを分かりやすく説明しています。



PICK UP!

「岡山県 企業と大学との 共同研究センター」と 岡山県寄付講座「おかやまIoT・AI・ セキュリティ講座」を開設

「岡山県 企業と大学との共同研究センター」と岡山県寄付講座「おかやまIoT・AI・セキュリティ講座」が10月1日、本学内に開設されました。「岡山県 企業と大学との共同研究センター」は、大学など高等教育機関の知の活用により新たな技術課題に対応しながら成長・発展を目指す県内企業を支援する「大学と連携した地域産業振興事業」の中核を担う拠点として岡山県が設置。県内企業と大学等とのマッチングや共同研究の推進に加え、大学における県内企業の研究開発力向上のためのプラットフォームづくりや企業人材育成を目指す教育プログラムの実施などに取り組みます。寄付講座「おかやまIoT・AI・セキュリティ講座」は、「Society5.0」に向けた岡山県内の中小企業の技術開発力、企画提案力の向上のため、IoT・AI・セキュリティを中心とした教育を行うことを目的に開設。今後、岡山県と本学は、連携して県内企業の研究開発力向上や企業人材の育成などをさらに促進し、地域の活性化につなげていきます。

■ お詫びと訂正

『いちよう並木』93号に掲載した情報に、以下の誤りがありました。深くお詫びするとともに訂正させていただきます。

P.7 青山竜文理事 プロフィール

誤) 平成28年、スタンフォード大学経営大学院修了(経営工学修士)
正) 平成18年、スタンフォード大学経営大学院修了(経営工学修士)



寺澤教授が教育ビッグデータによる 教育の個別最適化の社会実装活動で 文部科学大臣賞を受賞!

AWARD

大学院教育学研究科の寺澤孝文教授が、一般社団法人e-Learning Initiative Japanが主催する「eラーニングアワード2019フォーラム」において文部科学大臣賞を受賞しました。

寺澤教授は「高精度教育ビッグデータによる学力測定精度の飛躍的向上」という題目のもと、受賞が決定。この取り組みは、寺澤教授の研究開発から生み出された「マイクロステップ・スケジューリング法」という新しい技術が基幹となっています。収集された大量の学習データ(高精度教育ビッグデータ)から、これまで意識できなかった、わずかな学習の効果の積み重ねを個人ごとに可視化することや、学習者の実力の変動を正確に推定することも可能です。これにより、実カレベルで習得されたかと判定される問題を学習から外すことで、実効性を持つテラーメイドの個別学習が提供できるようになりました。

沈教授が、スウェーデン王立科学アカデミーより 「グレゴリー・アミノフ賞」を受賞!

AWARD

異分野基礎科学研究所の沈建仁教授・副所長が、カリフォルニア工科大学のDouglas Rees教授と共同で、スウェーデン王立科学アカデミーより結晶学の分野で優れた業績を上げた研究者に贈られる、2020年度のグレゴリー・アミノフ賞に選ばれました。

グレゴリー・アミノフ賞は、世界中で結晶学の分野で優れた業績を上げた研究者に、同アカデミーより年1件授与される賞です。今回、沈教授とRees教授は、「生物学における酸化還元金属クラスターの機能解明への根本的貢献」により共同受賞が決定。沈教授は、光合成における、光化学系II膜タンパク質複合体による水分解反応の触媒であるマンガンクラスターの構造と機能解明に取り組んでおり、これまでの業績が受賞対象となりました。

馬教授と山地准教授が 世界で最も影響力のある科学者に選出!

AWARD

Clarivate Analytics社(旧トムソン・ロイターIP&Science)が発表した、高被引用論文著者(Highly Cited Researchers)2019年版において、本学資源植物科学研究所植物ストレス学グループの馬建鋒教授、山地直樹准教授が選出されました。馬教授は5年連続、山地准教授は4度目の受賞となります。

馬教授、山地准教授は、植物の生育に不可欠な各種ミネラルの輸送メカニズムを数多く解明し、「植物・動物学 / Plant & Animal Science」分野において世界で最も影響力のある科学者として、国際的に高く評価されました。

引用数が顕著に高い論文は、科学コミュニティが意義深く有益であると判断した一つの目安となります。

OU NAVI

世界ユースサミット 「次世代リーダー・グローバルサミット One Young World 2019」 学生二人が日本代表として参加

GLOBAL

法学部3年の松本颯太さんと医学部1年の喜舎場朝基さんが、英国のロンドン市で10月22～25日に開催された世界ユースサミット「次世代リーダー・グローバルサミットOne Young World(OYW)2019」に日本代表団の一員として参加しました。



2人は、全体セッションやワークショップ、ネットワーキングなどに参加。SDGsを枠組みとしながら、気候変動から戦争と平和、教育、人権、リーダーシップ、グローバルビジネスなど、多岐にわたるディスカッションを行いました。さらに喜舎場さんは、全体セッションの一つ「One Young World 宗教間対話」において世界ユース代表の一人として選出され、現職のリーダーと共に壇上にあがりました。日本人として史上3人目となるステージ選出であり、本学として初の快挙です。

PICK UP!

建築家・隈研吾氏の 「特別招聘教授」就任が決定!

岡山大学では、令和3年4月に、工学部と環境理工学部を再編改組して、「Society5.0 for SDGs」の実践的教育を特色とする新生「工学部」を設置する予定です。

新生「工学部」の「環境・社会基盤系 都市環境創成コース」において、「建築教育プログラム」を新設する予定です。SDGsを推進する本学は、この「建築教育プログラム」新設ならびに木質建築教育研究に関し、建築家で東京大学教授の隈研吾氏に、高い専門的見地から指導・支援をいただくよう依頼しており、令和2年4月1日より岡山大学特別招聘教授として就任することが決定しました。



Photo © J.C.Carbonne



岡山大学は、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に貢献する活動に取り組んでいます。
この度、「岡山大学×SDGs」の活動に賛同する本学の学生・教職員を募集します!

対象

岡山大学の学生・教職員

アンバサダーの役割

Know

岡山大学SDGsについて
知る

Share

岡山大学SDGsを
共有する

Action

SDGsを「自分ごと」として
取り組む

スケジュール

- 4月13日 新入生向けガイダンス科目「岡山大学入門講座」のSDGs授業内でアンバサダーが作成したPR動画を上映予定(鋭意作成中!)
- 4月下旬 新歓イベントにてSDGsアンバサダーの活動を紹介
- 5月 ワークショップを開催し、活動をスタート!

問い合わせ

Twitter [@okymuniv_sdgs]
Instagram [@okymuniv_sdgs]

Looking for Okayama University SDGs Ambassador!

岡山大学SDGsアンバサダー募集!



学 章

岡山大学広報 いちよう並木

より良い広報誌を作成するために、皆さまからのご意見・ご要望をお待ちしております。

発行 : 岡山大学 総務・企画部 広報課

〒700-8530 岡山市北区津島中一丁目1番1号

Tel. 086-252-1111 Fax. 086-251-7294

E-mail www-adm@adm.okayama-u.ac.jp

<https://www.okayama-u.ac.jp>

岡山大学

検索

